

## 共同研究室

昭和五二年度第八回研究会（十月十四日）

▼テーマ 「社会思想の論理構造序説」

—— 浜崎正規著『現代と社会思想』—— 修羅

の妄執——を中心として——

報告者 浜崎正規氏

### 報告要旨

(一) 一九七六年十一月十三日、明治大学を会場として生誕した社会思想史学会は、創立にあたってつぎのように宣言した。その全文を紹介してみよう。

このたび、さまざまな研究領域において、思想史の社会的性格に関心をもっているものがあつまり、社会思想史学会をつくることになりました。

社会思想史が学会で市民権をえるようになったのは、国内はもとより国際的にも比較的あたらしいことであり、したがって社会思想史の研究者たちは、既成の各学問分野で訓練をうけ、そこに所属しながら、それぞれの側面から社会思想史を研究してきました。このことは社会思想史という多面的な研究対象に接近するのにかえって有利であったと考えられますし、今後この接近方法を継続すべきであると考えられます。しかしながら反面では、

それらの多様な接近に意見交流の場があたえられるならば、さらに効果をあげうるであろうことも容易に想像されます。

私たちが意図しているあたらしい学会は、このような意味で既成諸学会の存在を前提とした横断組織としての思想史研究者のあつまりであり、思想史の社会的性格への関心を核としたインテリゲンシブリーナリなものであります。思想的関心をおもちの研究者各位の広範なご参加を期待します。（社会思想史学会年報『社会思想史研究』一九七七年創刊号より。ミネルヴァ書房）

この創立宣言はいうまでもなく創立総会において万場一致採択されたものである。そして、この宣言内容にふさわしい第一回大会の研究報告会が二日間にわたって活発にもたれたのである。わけても、右の宣言文採択後にもたれた二つのシンポジウム（テーマその一「社会思想の諸類型」△報告者 出口勇蔵氏、竹原良文氏、中村雄二郎氏、司会者 水田洋氏▽テーマその二「一九三〇年代の社会思想」△報告者 早坂忠氏、清水多吉氏、佐藤康郎氏、司会者 城塚登氏▽）から私自身多大な教示と、示唆を与えられたのである。(二つのテーマのシンポジウム記録は前掲書に収録されている。)

(二) さて、右に紹介した創立宣言の中に「思想史の社会的性格」という文言がある。いわばこの文言にインプリシットにせよ社会思想という思想の思想的性格を一応性格づけして

いるといってもよいであろう。しかしながら一言で「思想史の社会的性格」といっても、そこには解明を要する多くの問題が伏在しているといわなければならない。すなわちそもそも一般的に思想という場合、どのような思考様式をいうのか、そして歴史的現実のもとでの思想とはどのような思想システムを論理的に形成してくるのか。つきには社会的性格という場合、その社会とはいったいどのような視座でとらえられた社会をいうのか、問いを発してみるとさけて通ることのできない問題点が露出してくる。

(三) ところでこうした問題点に対して社会思想史の研究者たちは、「既成の各学問分野で訓練をうけ、そこに所属しながら、それぞれの側面から社会思想史を研究して」(傍点は眞崎)くることによってみずからの解答を与えてきているということができる。私自身の場合、経済学の研究、わけでも経済学史研究という側面(表現上問題が残るが)から上記のような諸問題に対して一応の私なりの考えを多年にわたって「研究ノート」にまとめてきた。それらの「ノート」を三つの問題意識を根底にすえ、整理を試みたのが、拙著『現代と社会思想―修羅の妄執―』(玄文社、一九七七年六月刊)である。問題

意識の一つは、現代(今日とおきかえてもよい)という「時」と思想の論理関係(からみあい)の追求とということである(第一編)。その二つめは、思想の歴史的断絶面(性)≡非連続面(性)がわけても第二次大戦後は世界的にもまた科学史論(パラダイム論議の展開)的にも問題になったし、そうして問題として姐上にとりあげられてきてもいるが、そこでは連続面(性)の認識・理解・分析を意識的に捨象してきてはいないか(第二編)。三つめは、社会思想の範疇から現代(今日の)社会の思想の問題性を点検しなおすとすれば、そもそも今日の社会的性格は、基本的には経済理論上どのようなきざりされてくるかという点であった(第三編)。それにしても、ここでは私なりのヴィジョンの鮮明化の努力と問題提起に終わってしまった。なかんづく第三のそれとかわって、今後なお一層考究してゆかねばならない問題を多くのこしている。いいかえればそれらの問題はつねに第一、第二のそれらに回帰しながらたえず問うてゆかねばならない私の「旅」である。

四 　そこで今回の研究会の報告テーマは、私なりの三つの問題意識を統一化したものである。しかし報告内容は主として右の第一と第二のそれにかかわるものであることをこわ

っておく。

(1) 現代という「時」を思想状況のもとでどうとらえるか、この問題ほど昨今かまびすしい論議が展開されている問題はないといつてよいであろう。K・E・ホールディング教授として「脱工業社会」や「資本主義の文化的矛盾」などの理論を提起するダニエル・ベル教授を挙げるにとどめよう。

ここでの問題は、今日の科学技術主義のイデオロギーを単に告訴・告発することに終始してはならないということである。(i)思想史としての「現代」(今日)を生みだしてきた思想上の「近代」の本質を問いなおさねばならない。(ii)そうすることによつてはじめて新しい思想形成(創造)の全体化作用が連続性と非連続性との構造的把握のもとに生まれる。(換言すれば新たな理論形成の思想像を広い世界関係とダイナミズムのもとでとらえることができる。)

(2) (1)の今日の問題状況から出発することによつて社会思想の思想構造に回帰する。

(A) 社会思想とはどのような思想内容か

(B) その思想はいかなる性格と形態をもっている思惟の体系か

(C) その思想は何を自らの課題としてその解答を提供する思想であろうか

これら三つの問題に対して私はつぎのような考えをもっている。すなわち、

(i) 歴史的・時間的に与えられた諸条件は、人間が実践的に解決すべき課題を内包しており、この課題を解決すべき目的や方向は、人間の主体的自由意思なしに創造的自覚性に出るものである。

(ii) そのような意味からすると、社会思想は社会にかかわる単なる思想ではなく、社会変革の指導理念を心に展開させる思想であるといふことができる。

(iii) 社会思想は単に特定の個性によつて発言された「学説」を対象とするのではない。「学説」は知識形態としては「科学」的性格をもつものである。社会思想はむしろ特定の社会階級ないし社会運動の主体にとって常識的性格をもつていなくてはならない。

以上のような私見に立脚すると、社会思想史についてはつぎのようにいふことができよう。すなわち

(a) 人間的実践を媒介した理論的・理性的の系譜図である。

(b) 思想史というからには、社会変革そのものの歴史的過程を取扱うものではなくて、変革を準備し、実践する社会運動を領導するイデオロギーについて研究の対象を設定する。

以上が今回の研究報告の内容であるが、機会が与えられれば私の問題関心の第三点を軸芯にして報告し、現実的諸問題との対応関係(経済理論上のパラダイム論とかかわって)のなかで今回の報告を肉づけしてみることにする。

(付記)

私の拙い書物をたんねんに精読され、貴重なご意見をいただいた当報告会の問題提起者である飛田就一教授(哲学・論理学専攻)、甲賀光秀助教授(経済学・経済理論専攻)に深く感謝する次第である。

昭和五二年度第九回研究会(十月二日)

▼テーマ 近代天皇制研究の動向と問題点

報告者 後藤 靖氏

一

最近、維新から敗戦まで、日本の人民ばかりでなく朝鮮・

共同研究室

中国をはじめとするアジア諸民族を抑圧し支配しつづけてきた近代天皇制についての研究が、ようやく本格化してきた。近代天皇制をどうとらえるかということは、維新以降の日本近代史をどのようにとらえるかといううえでのもっとも核心的な問題である。なぜなら、それは支配・抑圧の国家機構であったと同時に、そのための特徴的構造をもった近代日本の経済・社会・イデオロギーのあらゆる領域にわたって、その形成と再編成を主導してきたからである。

ところで、近年のいわゆる近代天皇制にかんする研究の関心は、日本資本主義の発展にともなう階級関係の変化・階級闘争の進展という事態のなかで、維新憲法体制期に確立した天皇制国家が絶対主義的本質を維持しつづけたのか、それともブルジョア国家への変質をとげたのか、という点にある。こうした問題に接近するため、近年の研究方法は、経済構造・階級構成・階級闘争・国家機構およびイデオロギーの総体的な分析を行おうとしているところに旧来の研究次元とのちがいがあ。このような新しい方法論に立って、近代天皇制国家の諸段階を論証し直そうとしているものとして、次のよう

一三七(八四九)

な論稿をあげることができる。

下山三郎著『明治維新研究史論』（一九六六年）、星椋惇著『社会構成体移行論序説』（一九六九年）、後藤靖『日本近代史分析の一視角』（一九六八年）『歴史評論』二二二号）、同『近代天皇制論』（一九七一年）『講座日本史』第九卷、犬丸義一『戦前日本の国家権力と天皇制』（一九七〇年）『歴史評論』二四五号）、中村政則『日本資本主義確立期の国家権力』（一九七〇年）『歴史学研究』三六五号）、同『日本帝国主義成立史序説』（一九七二年）『思想』五七四）、山崎隆三『講座派理論の批判的継承のための序説』（一九七五年、大阪市大『経済学年報』三五号）、同『上からのブルジョア革命論』について』（一九七六年、大阪市大『経済学雑誌』七三—七五）、大石嘉一郎『近代史序説』（一九七五年、岩波講座『日本歴史』一四）、中村政則編『大系日本国家史』近代Ⅰ・Ⅱ（一九七五、六年）所収の諸論文、芝原拓自『近代天皇制論』（一九七六年、岩波講座『日本歴史』一五）、藤井松一『近代天皇制国家成立史序説』（一九七七年、立命館大『産業社会論集』一五号）などである。

以上にあげた諸論説に共通する方法上の特徴は、次の点である。

第一は、天皇制国家の形成・確立過程の分析にさいして、世界史的規定性を重視し、明治憲法体制のもとで確立した天皇制国家は、本質的に絶対主義としての基本的性格をもっているが、世界史の発展段階に規定されて古典的絶対主義とはその具体的存在形態においていちぢるしく異っているという指摘である。

第二は、確立した天皇制絶対主義の特異性はたんに形成・確立期の特質としてのみあるのではなく、その特異性が近代全体をつうじてどのように貫通したのかを検証しようとしていることである。

第三に、特異な絶対主義としての天皇制国家が日本資本主義の発展・階級構成の変化・階級闘争の進展に対応しながらいつ、どのように内容転化をとげるのかを明らかにしようとしていることである。そして、この第三点こそが今日の近代天皇制研究の一つの焦点をなしているといつてよからう。

## 二

ところで、以上の三点にかかわる論点を簡単にみることにしよう。これに関しては、およそ二つの見解に整理すること

ができる。その一つは、中村政則・芝原拓自・山崎隆三らのように、一九〇〇年代に天皇制国家がブルジョア国家に転化したという考え方である。第二は、一九一〇年代後半期から「上からのブルジョア革命」が進行し、ブルジョア国家への転化が開始されるが、それは終局的には完了しなかったとする見解であり、下山、星楚、犬丸、藤井、後藤らの考え方がそれである。こうした見解のちがいは、主要には天皇制国家分析のための国家論のちがいに過ぎていることはいうまでもない。そこで、この点にややち入りしてみよう。

まず中村の論旨を追ってみよう。中村は、「確立の論理は崩壊の論理を含む」という基本視点にたつて、天皇制の確立は「戦前日本社会における支配体制の重要な三つの構成要素ともいべき天皇制・資本主義・地主制、この三つの基本的カテゴリーが一定の構造的連関をもって定置し確立」したときに求めるべきであるとして、開港～西南戦争Ⅱ「天皇制絶体主義の成立」、自由民権期～帝国憲法公布・帝國義会開設Ⅱ「絶対主義的天皇制への移行」、日清戦後～韓国併合Ⅱ「絶対主義的天皇制の確立」という段階区分を設定した。中村の「天皇制絶対主義」とはいわゆる古典的絶対主義という理

解であり、「絶対主義的天皇制」とは国家類型としては「半封建国家というよりもむしろブルジョア・地主国家（Ⅱ軍事的半封建的資本主義国家）」としての本質をもつが、その国家形態上の特徴からみれば、それは国家主権をいぢぢるしく制限した絶対主義的国家形態」のことであり、「対立的二契機（類型と形態のズレ）の統一」としての特異な存在形態をとっている、という特殊の規定を与えられている。日清戦後の天皇制国家が「軍事的半封建的」ではあれ「資本主義国家」類型であるにもかかわらず、なぜ「絶対主義的国家形態」であるにもかかわらず、「ブルジョアジーなり地主は、権力を直接に掌握していたわけではなく」、天皇制政府官僚が「その相対的に大なる役割と似而非立憲的形態で軽く粉飾されているに過ぎない、その絶対的性質を保持」していたからであるというのである（前掲書Ⅱ六～七頁）。ところで、中村がブルジョア・地主プロックの成立の根拠としている指標は、日清「戦後経営」が農商工高等会議にみられるように「ブルジョアジー上層部の意向を無視しては一步も進められず」、また同時に、例えば「第一三議会では初期議院会以来の懸案であった地価修正

法が地租増徴法と抱き合せて提出・通過されるにいたった結果、これを契機に西南日本の地主と東北日本の地主との地域的利害の対立構造が解消され、地主の全国的階級的結集を促す重要な契機」となり、さらに農会法(一八九九)・農会令(一九〇〇)の公布によって「地主階級は一個の階級として自己を政治的に構成するとともに、支配階級内へブロック・インしていく。が、天皇制・ブルジョアジー・地主の「三者の『永続的』ブロックは未だ完成されない」(一〇二頁)。日露「戦後経営」の過程で、「独占金融ブルジョアジーの政治的発言力が増大(公債引受シンジケートの結成)」し、また地主階級は、その最大の要求であった米穀輸入税の引上げ(第二六議会、一九一〇年)地租軽減(同議会)および農会法改正Ⅱ帝国農会設置(同議会)に成功することによって、ここに天皇制官僚を媒介とする独占資本と地主階級との「永続的」ブロックが完成する。こうして一九一〇年前後の時期に「ブルジョア・地主国家類型」が最終的に確立する(一三三〜三八頁)。

ところで、中村のこのユニークな見解には、方法のうえでいくつかの疑問がわく。その第一は自由民権期から天皇制国家が絶対主義的天皇制Ⅱ「ブルジョア・地主国家類型」への

移行を開始し、日露「戦後経営」のうちに確立したというとき、その指標が明確ではないことである。天皇制国家が類型として「ブルジョア・地主国家Ⅱ」軍事的半封建的」ではあれ「資本主義国家」であるとすると、類型としての資本主義国家が一般的にもつところの国家の構成原理たる「議会↓政府↓官僚制」という規定序列が具現されたかどうか、あるいは少くとも官僚制の中にブルジョアの規定性がどういう形で貫徹しはじめたかを明示すべきである。だが、この点については明らかにされてはいない。中村は、政策の変化を主たる指標として封建国家的・国家類型からブルジョア的国家類型への移行・転化を説明しているにすぎないように思われる。この点については、山崎の見解——「明治二十年以降とりわけ日露・日露両戦争間のいわゆる戦後の経営のなかで天皇制国家の推進した諸政策は、ほとんどすべて資本主義の発展のためのものであり」、「大ブルジョアジーの意思を国家に反映させるための組織化(農商工高等会議↓生産調査会等)もすんだ」、だから「天皇制国家の階級の本質はすぐれてブルジョア的であり」、「絶対主義的国家形態をもつブルジョア国家」というべきである(前掲稿および「近代天皇制論」——石井寛治他編

『近代日本経済史を学ぶ上』、一九七七年、有斐閣）とも共通している。だからこそ、第二に類型と形態との区別が必要になつたと考えられる。しかしながら、中村・山崎の類型と形態論は国家論からみれば奇妙である。形態とは類型の歴史的・具体的存在形態のことであり、絶対主義的統治形態は封建的国家権力の一形態にはかならない。問題はむしろ一九〇〇年代においてすら絶対主義国家形態⇨封建的国家類型であつたにもかかわらず、なぜその国家が資本主義発展のための諸政策を強力に推進しえたかという特殊性と、そしてまたそこでの資本主義化の構造的特質こそが解明されるべき課題であろう。中村・山崎に対する疑問は、芝原の場合にも同じように指摘することができる。

芝原は、日清・日露「戦後経営」の過程での資本主義の確立⇨帝国主義への転化、階級関係の変化、さらに地主層の階級的結集やブルジョアジーの政治的進出を取り上げ、そこでの天皇制国家の指導力や法的保護の強さを立証しながら、「日清」戦後経営」いろいろの諸政策⇨法体系は、すべて資本主義的基盤強化のために捧げられ」たものであり、「近代天皇制は、そのかぎり軍事・半封建的構造を土台としつつ

も、資本主義・帝国主義的」なものとなり、「絶対主義的国家機構⇨国家形態をもつた資本主義・帝国主義の本質を有する国家権力」となつたと規定している（前掲稿）。芝原は、それを論証するために、日本資本主義の展開構造の特質や官僚・軍事機構の変遷あるいは議会構成の変化という多面的な考察を行っている。しかし、そこでの基本的論点は経済政策の変化⇨資本主義的基盤の強化策という点である。したがって、ここでも天皇制国家機構、そのもののブルジョア化⇨帝国主義国家権力化についての国家機構とその構成原理の転換については不問に付したままである。

政策とは国家の機能であり、そこから直接に機構そのものの変化を説明することはできない。いわんや経済政策は、国家機能のうちの社会的機能にかわるものであり、それはいま一つの統治機能を補完する性格をもつものにはかならない。したがって、国家権力の変化をいうためには統治機構⇨国家諸機関の構造連関をこそ問題にすべきである。具体的には、星塾惇によって強調された「議会⇨政府⇨官僚制」という規定序列の実現過程を説明するか、あるいは、わたしが前掲稿で指摘したように「上からブルジョア革命」論によって、国

家権力の中枢である官僚制そのものの変化をもたらす政治・政策の決定過程や立法過程の機構的変容を問題にすべきだと考へる。

利谷信義・本間重紀の「天皇制国家機構・法体制の再編——一九一〇～二〇年代における一断面」（中村編、前掲書近代Ⅱ）は、一九一〇～二〇年代の再編過程の分析方法だけでなく、天皇制国家の総過程をとらえる上で画期的なものである。それは、従来の方法が「議会構成を変化させる選挙制度の改革と政党の変化、政党の影響を及ぼしうる方向での官僚制および官吏養成制度の改革、政党内閣の存続を保障するための軍制改革、元老が政治的影響力を減退させていく過程、枢密院・貴族院の若干の制度的改革と政党による操作、ブルジョアジーの人権を保障するための司法改革とくに陪審制度の採用等々」から天皇制の一定の変容を証明しようとしたのに対して、「国家機構の深部における再編現象と国家機構が人民の生活と直接に接触する部面における再編現象」を視点におきながら「国家機構・法体制の再編の全体像を構成しようとする意欲的なものである（一五五～一六頁）。その具体化として各種審議會を分析し、内外の危機に直面しつつ天皇制国家が、

一方では新旧勢力の「挙国一致」による新たな緩衝装置をつくり出すと同時に、他方では天皇制国家機構の根本的改革を回避し、ファシズムへ転化しえたことを明らかにした。

近代天皇制研究の方法はまだ確立してはいないが、利谷らの問題提起は今後継承発展させられるべきである。

昭和五二年度第十回研究会（十一月四日）

▼テーマ 英国留学を終えて

報告者 小野 進氏

報告要旨 一昨年の八月初めに羽田を発ち、昨年の九月中旬帰国、英国における Sabbatical Leave を無事終えることができた。約一年間という短期間であったが、生れて初めての外国経験は私にとっては、本当に有意義なことであった。

この約一年間のロンドン留学において、強く感じたことは、第一に、英国では、個人主義 (Individualism) が深く根づいていること、第二は、日本の GNP は米ソにつき世界第三位であるけれども、英国病などといわれている英国などより、個々人の、精神生活を含めた生活の質 (The quality of life) はまだまだかなり遅れていること、第三に、これまで、日本

における英国観が偏見でもってみられており、英国人の生活および英国社会にかんして信頼しうる感性的認識ゆきで書かれた文献は多いけれど、信頼しうる感性的認識にもとづいて書かれた文献が何故このようにほとんど欠如していたのかということであった。この点にかんしては、滞英約十年で英国をもっともよく知っておられる経済学者で、LSE (The London School of Economics) の職業として経済学を講じておられる森嶋通夫教授の近著『イギリスと日本——その教育と経済』(岩波新書) においてかなりの程度取り除かれたのではなからうか。

LSEの Michaelmas Term は、一九七七年は十月三日に始まり、十二月十三日に終了する。森嶋通夫先生に相談した結果、学部と大学院の講義にでることにする。大学院は、Marx, Walras and Keynes in the light of Contemporary Economic Analysis をテーマに、Michaelmas Term は、Marx's Economics" 二十時間、Lent Term (一月九日から三月十七日) は、Marx, Keynes and Neo-classicals" 二十時間であった。日本の経済原論に対応する学部の "Economics" は、Summer Term (四月二十四日から六月三十日) を含めた通

年で、二十五時間。"Economics" は、高等学校などで経済学と数学の A レベル (Advanced Level) に合格した学生ややうでない学生を対象に三種類用意されている。森嶋先生は、高等学校で経済学の A レベルをとった学生を担当しておられた。したがって、講義の水準はすこぶる程度が高く、森嶋著『近代社会の経済理論』(創文社) の英訳 "The Economic Theory of Modern Society" (Cambridge University press) の線にそっておこなわれていた。ちなみに、経済学の A レベルの試験問題を若干あげておこう。「資源配分のメカニズムとしての価格体系の役割を議論せよ」、「労働組合は賃金を引き上げることとはできるか? あなた自身の答を説明せよ」、「大多数の英国の産業が小規模であるというのは、規模の経済が重要でない、ということの意味するものか」、「二つの異なった国の生活水準を比較するさいにどのような困難が生じるのか」といった調子の問題である。これらと、日本式の Multiple Choice Questions を含めて、計六時間の試験がおこなわれる。"Economics" の受講者は、二〇〇名程度であらうか。LSEでは、クラス制度とてうのがあり、class teacher は、十名ぐらいの学生を受けもち、学生が、講義で理解でき

ないところは、このクラスで議論、質問を通じて消化されていくのである。講義の内容を知っておくため class teacher は、常時 Economics の講義に出席している。総じて、イギリスの教育は、小学校から大学まで日本のような画一的教育ではなくて、一人一人の個性を尊重する教育であって、このようなクラス制度は重要視されている。私の知っていたLSEの学生のK君から自分の class teacher は good であるという話をよく聞いた。class teacher は lecturer, senior lecturer, reader が主にあたる。LSEの場合、教員一人当りの学生数は、平均十人ぐらい、学生三人のうち一人は外国人学生であり、世界でもっとも国際的な学校の一つではなからうか。英国の大学生は非常にめざまれている。私の知っている上記のK君は、当時まだ自宅通学であったが、地方教育局から学費(授業料から自治会費まで含む)を支払ってもらい、なおかつ年一〇〇〇ポンドの生活維持奨学金をもらっていた。また、クイーン メリー カレッジで機械工学を勉強しているC君は、やはり学費とは別に、生活維持奨学金年一〇〇〇ポンドをもらっていた。生活維持奨学金の大きさは、両親の収入によって異なり、夏休みにアルバイトをしなかった場合、

申請すれば、vacation grant を得ることが出来る。そして、また、結婚している学生で、親からまったたく経済的に独立していれば、扶養家族のための扶養割増金を要求することができる。また、もし、離婚、別居した場合も、扶養割増金は額される。英国の大学では、ほとんど全部の学生が奨学金(scholarship)を得ており、奨学金は返済する義務はない。学生は、親から経済的に独立して生活できるシステムになっている。英国では、男女とも、学生であろうとなかろうと、一六〜一八歳になれば、だいたい親元を離れ、精神的、経済的に親に依存しない生活を始める。

「マルクスとケインズ」という問題は、日本でも、一時、好まれてよくとりあげられたテーマであったけれども、「マルクスとワルラス」や「マルクス、ワルラス、ケインズ」というような問題は、日本でも英米でもいままでとりあげられなかった。これは、おそらく、ワルラス経済学について流布されている先入見によるものである。大学院では、森嶋先生は、このような興味ある基本問題を正面にすえて、ワルラスの奥さんは彼より八歳年上で、マルクスの奥さんは彼より四歳年上であり、それ故、ワルラスの方が革命的であったと

いうようなジョークを時々まじえながら、自分にいきかせるような先生独特な調子の講義はなかなかおもしろかった。

「ワルラス経済学は、内容を犠牲にして形式を強調しており、その内容は稀薄である。我々は、資本理論において、ワルラスの取扱いに、この例をみいだすことができる。彼の貨幣理論は、形式主義の一つの証明として追加されるであらう」。

「ベームやウィクセルが、貨幣の問題についてやした何千頁に比較して、ワルラスは、利子率が如何にして決定されるのかを示すのに『要論』において正確に四十頁をあたえたにすぎない。ワルラス理論は形式的には完全無欠であるが、その内容は何であるのか」。この言明は、M. Baug のワルラス評価であり、日本でも広く受けいれられているものである。が、これは、今日のワルラス派が、お互いに数学的能力を競いあい、一般均衡理論の理論家達が、ワルラス自身の発見になる法則や定理の証明や再証明にだけ関心をもった結果によるものと思われる。Baug は、ワルラスの一般均衡体系から資本主義経済の変動法則を誘導することはできないとして、ワルラスの形式主義を批判する。また、ヒックスも、『価値と資本』において同様なことをいった。

## 共同研究室

森嶋先生のねらいは、資本主義というシステムがいかにワッキングしているのかを、ワルラスのヴィジョンに則して、数学的な経済モデルによって、ワルラス理論を再構成することである。ワルラスとマルクスは、お互いにその業績を無視しあった。マルクスは、労働価値説を基礎に彼の全理論を構築しようとした。ワルラスは、稀少性価値理論であった。この点では、両者に、大きな相違があるけれど、ワルラスを、つぎのような意味で、リカードイアンであることに同意するならば、マルクスも、ワルラスの結論を喜んでアクセプトしたであらう。長いあいだ無視されてきた『純粹経済学要論』第七篇、第三十六章「発展的社會における價格の一般の変動法則は、資本主義の全体系のワッキングのいくつかの法則を導出しているのである。すなわち、発展的經濟においては、労働の價格としての賃金は、実質的には変化しない。土地用役の價格は、上昇する。純粹所得率（利潤率あるいは利子率）は低落する。ワルラスは、リカードをイギリスにおける純粹経済学の創設者であるときなし、とりわけ、リカードの價格方程式をワルラスの一般均衡体系の構成部分であると考えた。マルクスは、彼の政治経済学の上に、社会主義を基礎づけた。

ワルラスも、純粹経済学の上に、やはり、社会主義を考察した。それ故、マルクスとワルラスは、完全にアンタゴニスティクなものと思定することは正しくない。両者とも、リカードの "The two greatest disciples-or critics" であつた。

ケインズ経済学のミクロ的基礎というのは、現代経済理論の流行のテーマである。これは、通常、ヒックスの『価値と資本』におけるヒックスモデルを使用している。が、ヒックスとケインズのあいだにある重要な相違に注意しておかなければならない。ケインズ体系においては、投資・貯蓄方程式を維持しながら、債券の需要・供給方程式を排除する。ヒックスは、投資・貯蓄方程式の明示的な場所が存在しないモデルを提示した。ワルラスは、この点では、ヒックスとは異なり、債券方程式のかわりに、投資と貯蓄の集計的な方程式を維持するケインズとは同一である。

ワルラスには、労働者、地主、資本家、企業者という明確な四つの階級区分がある。近代の資本主義では、投資と貯蓄は別々の独立した経済主体によっておこなわれる。ワルラスでは、集計的貯蓄の主要部分は、資本家からくる。企業者は、生産と投資を決定する。ワルラスは、投資と貯蓄が別々の独

立した経済主体によっておこなわれることに注目したけれど、彼は、その経済的意味を解明せず、ワルラスの実際のモデルでは、このような見解は反映されなかった。ワルラスにあつては、彼の階級区分についての社会学的観点と数学的モデルにはギャップがあつた。このギャップをうめれば、ケインズと等しいモデルをもつことができるのである。

以上のようなことが、私が理解した、森嶋先生の大学院での講義の基本線であつたと思う。Michaelmas Term の初めの頃は、たしか、日本人は私一人であつたと思うが、その後一カ月たらずして、南山大学のM講師、東北大学のH教授も、森嶋先生の大学院の講義に、Lent Term の終るまで毎回聞きにこられていた。そして、Lent Term の終り頃から筑波大学のF教授も出席されるようになった。昨年四月に入り、Summer Term になると、大阪大学のS教授、広島大学のS教授、関西学院大学のI教授等々の方々が、"Economics" の講義に出席しておられた。

ロンドンに到着したその日、市内のホテルに一泊して、翌朝、さっそく house hunting にかけて、Night Bridge 近くのイギリス人経営の不動産屋の紹介で flat を借りた。こ

の flat には、二カ月足らず住んだが、LSEに通うのに不便であることがわかってきたので、新しい flat に転居。ここは居心地がよかったので、帰国するまでほとんど住みついた。新しい flat の Landlady (主人はピアノメーカーで、S 商会として、いまでもロンドンにある) は、品のいい老婦人であった。この人が、戦後まだここに住んでいた頃、居間にグランドピアノが置いてあり、親交のある Furtwangler, Kemperer, A. Schnabel, R. Tauber, E. Schumann などの音楽家が訪問したこともあるとのことだった。新しい flat の隣りに八〇歳過ぎの元氣そのもののおばあさんが一人で住んでいた。このおばあさん、それに二人の娘さんには、通りいっぺんの近所づきあいを超えて親切にしていたき本当にありがたかった。このおばあさんの御主人は、第一次世界大戦後、ドイツのライプツヒヒ大学で経済学博士号をとった経済学者であったが、第二次世界大戦中、ナチスの強制収容所で殺害されたのである。He was killed in the concentration camp といわれたが、簡潔な言葉だけに深く心に残った。いつか、high tea に招かれたとき、亡き夫の論文等を見せてもらう機会をもった。そのおり聞いた話しであるが、一九二三年、当

共同研究室

時ドイツに留学していた日本人を世話していたことがあり、彼女の主人がドイツ語の本を贈呈したことがあるけれど、昔のことでその日本人の名前を思い出せないといっていた。おばあさんの娘さんの H さんは、The City University の中国文学の講師で、もう一人の娘さんは、女子のパブリック・スクール (昨年までは、Direct Grant School であった。Direct Grant School については、森嶋、前掲書をみられたい) のドイツ語とロシア語の先生であった。中国文学講師の H さんの ex-husband は、中国研究家のイギリス人の C 博士で、一九五八年の大躍進の時、一年間、夫婦で北京に留学した。そのおり、十三陵ダムの建設工事に参加したとの話しをしたので、毛や周もあの時奮をかついで土はこびをやりましたね、といううと、毛や周は、たった数日だったけれど、自分達は、二週間ほど勤労奉仕をしたとちよびり皮肉はくいていた。彼女の母親の flat の居間の壁にモンペ姿で奮をかついでいる彼女の古い写真がほこらしく飾ってあった。この H さんは、おばあさん、つまり、彼女の母親のところを訪ねてくるたびに、私どもの flat に立ち寄り、日ごとに話題はかわったけれど、中国問題からイギリス政治の話しなどいろいろ話して帰った。

一四七 (八五九)

彼女は、ロンドン大学の SOAS (The School of Oriental and African Studies) の出身で、中国文学の専門家であるから当然であるが、中国語を、話し、読み、書きできることはもちろん、所謂漢文も理解することができ、漢詩など自分で作ったりしていた。彼女は、イギリスの中国研究者に顔が広がった。しばしば、彼女と一緒にロンドン大学の中にあるプールに泳ぎにいったり、テニスをしたり楽しむ機会もあった。もう一人の娘さんの R さんも、やはりロンドン大学の School of East European and Slavonic Studies の出身で、丁度、彼女が、アメリカに行って一カ月ほど不在だったので、帰国直前の二週間ほど、彼女の好意で、ロンドンの中心から地下鉄で三十分ぐらいのところにある彼女の家をつかわせてもらった。広大な牧場が近くにあり、中産階級の住む閑静な郊外住宅地だった。

私の英語の先生である S さん(オックスフォード大学で経済学の学位をとり、現在はラテン語の教師で、ラテン語の英訳本がある)も、いろいろ親切にしていた。S 一家とも家族ぐるみのつきあいであった。お茶や夕食に招待されたり、あるいはストリート・パーティなるものに誘われたり、これだけでなく、

外国人にはなかなかわかりにくい、イギリス社会の日常生活の情報を教えてもらった。ある時、この人の小学校に行っている子供が、スヌムとトシコに卒業を記念する学芸会 (School Play) をみせたいからといっているというので、みにいった。その時、私が印象にのこったのは、司会をしていた一人の黒人少年が、もっとも人気があり、よくいわれる人種的偏見などあるような雰囲気ではなかったということである。女房が風邪で熱をだした時、S さんはいい医者を紹介するからと電話をかけてきてくれたりした。

女房の英語の先生であった H 夫妻も、イギリス人のよそいきでない実際の生活をみせようとして、夕食はもちろん、パンケーキ・パーティをはじめ各種のパーティ等に招いてくれたり、また、一緒に、旅行して、彼等の実家に数日とまったりした。

Prof. Yamey を supervisor として、L S E の大学院に産業経済学を研究しにきていたイタリア人の若いエコノミスト A 君とソフィアローレン型の美人でボロニア大学で英文学を勉強した彼の奥さんとも、親しいつきあいであった。一週間に一回は、お互いに行ったりきたり、また一緒に彼等の車

(表I) 青年労働者の人生観の比較 (％)

	日 本		イギリス		
	事務系	労務系	事務系	熟練労務系	不熟練労務系
お金で貯金するより使った方がよい	34.9	42.8	39.5	42.1	48.1
もっとも頼れるのは自分だけだ	75.4	82.4	30.3	38.0	41.7
人生は愛する喜びを愛される喜びをうるためである	81.2	72.0	84.2	84.5	84.4
友だちつき合いは深入りしない方がよい	27.8	34.5	59.6	65.3	67.5
今の社会はあくせくしないでのんびりするのが大切だ	73.1	70.0	33.8	45.4	43.1
互に察し合っていたわる人間関係がよい	89.1	86.0	96.2	98.2	94.9
人類の英知で世界大戦はさげられるであろう	65.7	62.6	46.3	49.4	51.2
人類の英知で地球の汚染や資源の減失は防げるだろう	49.3	48.8	45.6	55.7	49.2
30年後はもっと住みよい社会になっているであろう	28.5	32.1	28.8	31.0	35.3
計 (実数)	— (568)	— (414)	— (423)	— (271)	— (295)

(出所) 間 宏『イギリスの社会と労使関係』p.171

個とは異なる。もし、上記の人々が、利己主義者だとすれば、これほどまでに見知らずの私どもに国境をこえて親切にくれなかったであろう。私どもが、ロンドン滞在中、日常生活においてほとんどの困難を感じなかったのは、これらの人々の私心のない親切に多く負っている。

で旅行にでかけたりした。ローマ大学商経学部のF教授(結局、イタリア全土のゼネストで会えなかったが)に会いにローマへ行った帰途、フロレンスに近い彼等のりっぱな家にとめてもらったりした。イタリア人は、みていると、さすがは、西

以上のような交流を通じて、何かの機会に、数人が、彼等が Individualist であるということを知っていたのを思いだす。日本では、Individualism と Egoism が混同されているようだ。個人主義は利己主義 (egoism) とは異なる。私心と

表一は、総理府青少年対策本部編『世界の青年・日本の青年——世界青年意識調査報告書——（速報編）』（一九七三）である。

この表は、日本の青年労働者は、個人主義よりエゴイズムの傾向をもち、英国の青年は、真の個人主義を示しているのではなからうか。「もつとも頼れるのは自分だけだ」と考えている日本の青年労働者は、七五〇パーセントであるけれど、英国のそれは三〇〇〜四〇〇パーセントで、日本の青年の方が個人主義的傾向をおびているようにみえるが、「友だちのつき合いは深入りしない方がよい」では、英国の青年の方が、日本のそれよりより個人主義的である。他方、「人生は愛する喜び愛される喜びをうるためにある」、「互に察し合っていたわる人間関係がよい」では、この点に高い信頼を置く英国の青年労働者の特徴がよくでている。

個人主義とは何ぞやという一般的な問題には、さしあたり、関心はない。日本的集団主義との関連における個人主義に関心がある。聖徳太子の憲法十七条は、日本思想史上における専制君主の最初の政治哲学の開陳である。その第一条の冒頭に、「和<sup>ヤツ</sup>グを以て貴しと為。忤<sup>ウカ</sup>フルこと無きを宗と為」（以和為貴。無忤為宗）（日本思想史大系『聖徳太子集』

岩波書店、二二一ページ）とおごそかに宣言している。これは何を意味するのであろうか。<sup>(3)</sup>

典型的にいえば、分権的な個人主義社会では、世間、集団、団体より、個人が最も大切であるから、世間等々がやっていることに、個人は必ずしも歩調をあわせる必要はない。個人が同調するかどうかは、個人の選択の問題である。それ故、このような社会での集団、団体の和は、各人の良心と理性にしたがったウソのない行動によって保障される。これに反して、集権的な集団主義社会では、諸集団、諸団体がやることに對して、個人は、決して直接的な物理的暴力によるものではないけれど、目に見えない圧力で、皆と個性のない同一歩調をとらなければならず、精神的緊張の強い社会である。もし、同一歩調をとらなければ、砂漠の中に一人ほりだされたようになることはまちがいない。<sup>(4)</sup> イギリス人は、「全隊止まれ、右向け右」や「一緒に働き、一緒に学び、一緒に遊ぶ」というような式の精神は大きらいで、耐えられないのである。イギリス人は、型にはまった画一的なことよりも、変人奇人の類の個性のある人間が好きなのである。いつか、上記のSさんから“My husband is basically crazy”とごうのを聞

(表Ⅱ) 仕事の速度の比較 (％)

	日 本			イ ギ リ ス		
	鉄 鋼	電 機	計	鉄 鋼	電 機	計
自分の速度	36.5	25.1	30.8	73.7	77.7	75.8
機械の速度	17.4	24.7	21.0	15.7	0.7	8.1
作業標準(労使交渉)	1.7	0.7	1.2	0.4	1.8	1.1
作業標準(会社決定)	21.5	29.6	25.6	1.5	9.5	5.6
作業標準(職場決定)	1.0	1.4	1.2	1.8	8.8	5.4
作業標準(その他)	3.1	2.8	3.0	0.4	0.7	0.5
流れ作業(融通性あり)	3.1	5.2	4.2	0.7	0	0.4
流れ作業(一定速度)	9.0	9.1	9.0	5.5	0.4	2.9
不明	6.6	1.4	4.0	0.4	0.4	0.2
計	99.9 (288)	100.0 (287)	100.0 (575)	100.1 (274)	100.0 (283)	100.2 (575)

(出所) 前掲書 p.135 「日英意識調査」

(表Ⅲ) 日英の人口と土地利用状況 (単位ヘクタール)

	1975年 人口 (千人)	総面積	農 地			森 林	そ の 他
			耕 地	樹 園 地	牧 場 地 牧 草 地		
日本	109571	37231000 (100%)	4978000 (13.4)	637000 (1.7)	242000 (0.7)	25043000 (67.2)	6331000 (17.0)
英国	55968	24404000 (100%)	7078000 (29.0)	76000 (0.3)	11484000 (47.1)	1981000 (8.1)	3785000 (15.5)

(出所) 『日本国勢図会』より作成

いたことがある。上記にあげた人々との交流の中で、日常生活における個人主義的 behavior をしばしば発見することができておもしろかった(『立命館学園広報』第八一号「三六ページ、小野進「ロンドン留学記」をみられたし)。

近代官僚制の特徴が、職務権限の明確化と中央集権化にあるとすれば、この面において日英の企業において、いちじるしい相違があるのである。日本の企業の官僚制の特徴は、英国の企業のように、職務を単位とした分権化ではなくて、職場を単位とした中央集権化にある。英国の企業は、個人主義が強いために、中央集権化はさげられ、職務権限の明確化という形で、近代官僚制に貢献した。たとえば、情報は企業権力の源泉の一つであるが、英国の企業の場合には、本社は、各現場の情

報を僅かしかもっていない。各現場の担当者は、自己の部署にかんする情報を抱えこみ、企業外の人間でなく、企業内の上司にも見せない。中央は現場の情報を集中することは困難である。だから、英国の企業組織は、組織効率の点からみれば、欠陥であるけれど、これを、労働者の側からみれば、かならずしもそうでないのである。とにかく、現場の労働者の作業方法や作業速度については、労働者の自由・自主性がかなり認められているのである(間宏著『イギリスの社会と労使関係——比較社会学的考察——』日本労働協会、二七—三五ページ)。

表IIは、このことを物語っている。

最後に、個々人の生活の質について一言だけつけ加えておきたい。日本人の衣食住のうち、衣食については、国際水準に達していると思うけれど、住とそれを取りまく社会環境については、英国に比較して、まったく *miserable* である。イギリス、とくにイングランドを旅行するとどこまでもうねうねと平地が続き、山地の多い日本と大層異なる。可住面積  $1\text{ km}^2$  あたりの人口は、イギリス(二五〇人)は日本(九〇〇人)の約四分の一である。もちろん、このようなことを含めて、表IIIのような基本的事実から出発しなければならぬであらう

うが、だからこそ、都市計画を含む「革命的」な政策によって根本的な解決をはからなければ、このままいくと、日本全体がスラムみたいになるのではないかという危惧をもつ。イングランドやスコットランドの田舎の自然の美しさは聞きしに勝る。グラスゴー大学のJ・グレイ氏をおとすれたおり、氏が、ロッホ・ローモンドへ案内してくれる車の中で、イングランドやスコットランドの自然の美しさを保つために、英国は経済的な困難にもかかわらず、ばく大な費用をかけているというような話しをしてくれた。(一九七八年二月六日)

注(1) 個人主義そのものについて書いた文献ではないが、下記の文献が参考になる。J・S・ミル 塩尻・木村訳『自由論』岩波文庫、J・S・ミル 末永茂喜訳『経済学原理』(5) 岩波文庫、J・M・Keynes, 'The End of Laissez-Faire', in 'Essays in Persuasion, The collected writings of John Maynard Keynes'. M・クランストン、小松茂夫訳『自由——哲学的分析』(岩波新書)、西尾幹二『ヨーロッパの個人主義』講談社現代新書。

(2) 岩田龍子『日本の経営の編成原理』文真堂、飯島宗一・熊田豊之編『日本人とは何か』日本経済新聞社、宮城音弥『日本人とは何か』朝日新聞参照のこと。夏目漱石『私の個人主義』雪華社刊。漱石曰く「あれほど自由でそしてあれほど秩序の行き届いた国は恐らく世界中にないでしょう」「日本な

どは到底比較にもなりません」(一八五ページ)。

- (3) 森島通夫『近代社会の経済理論』創文社はつぎのようにいっている。「和」……とは、支配者との和、マジョリティとの和である。したがって和を欠くもの、支配者と意見を異にするものは国外追放ないし島流しをさしたのである。「日本は古代以来つねに社会優先的であり、民主化し個人主義化した筈の戦後でも、この基本的性格はほとんど変わっていない」(二八ページ)。

- (4) (3)の岩田龍子、前掲書。大田充『集団主義の構造』産業能率短期大学出版部四九一五ページ参照のこと。

- (5) ビーター・ミルワード、別宮貞徳訳『イギリス人と日本人』講談現代新書二七ページ。筑波常治『米食・肉食の文明』日本放送協会は、「民主主義という概念には、その血肉となっている個人主義が当然ふくまれていなければならない」(一五二ページ)といっている。

### 昭和五二年度十一回研究会(十一月十八日)

- ▼テーマ 総需要抑制策と景気浮揚策について

報告者 東郷 久氏

- ▼テーマ 独占価格の実態と分析方法の諸問題

報告者 佐々木秀太氏

共同研究室

(報告要旨はともにも第二十六巻・第六号研究の項に掲載予定)

### 昭和五二年度第十二回研究会(十二月三日)

- ▼テーマ 過剰資本と独占支配

報告者 山本幹夫氏

(報告要旨は第二十六巻・第六号研究の項に掲載予定)

### 昭和五二年度第十三回研究会(十二月十六日)

- ▼テーマ 『罪と罰』(ドストエフスキー)の背景

報告者 奥村剋三氏

#### 報告要旨

一、ローザノフ、メレンチュコフスキー、シエストフ、ベルジャーエフらのドストエフスキー論以来、この作家は哲学・宗教論の次元で主観的に解釈されることが常であった。ようやく最近になって彼の「ポエチカ」(創作法)の研究が見なおされ、作品の細部の考証も進んでいる。このような傾向には、象徴派の理論活動に特有の主観的・審美的アプローチに「客

観的・科学的態度」を対置したロシア・フォルマリズムの影響が認められる。文学的伝統との関係、文体論的考察、作品構成の手法の研究等々が今後も有力になっていくであろうが、反面、作家が生きた時代や社会、作品の背景が等閑視され、欠落していく危険がある。とくに『罪と罰』のような作品の場合、十九世紀六十年代のロシア社会、そのイデオロギーの状況ときりはなしては作品研究は深まらない。「歴史の具体的な経験との関連」（レーニン）で作品を見る観点が必要なのではないか。

二、十九世紀六十年代のロシア社会は、一八六一年の農奴解放を頂点とした社会的激動を体験した。農奴解放の実行をめぐって保守派、リベラル派、急進派（チエルヌイシエフスキイら革命的民主主義者）のはげしいイデオロギー闘争が行われた。『罪と罰』は六十年代の革命の高揚が挫折した反動の時代に書かれているが、キルポーチンは、この小説の中で「六十年代の人々」と思想が、その在り様如何にロシア・西欧・人類の未来がかかっていた世界的概括の水準にまでたかめられ」と指摘している。赤貧に打ちのめされたマルメラードフは、酒場でラスコーリニコフにいう。「……新思想

を追っているレベジャートニコフ氏は、いまでは同情は学問上でさえ禁じられている……と説明してくれました」。この考えを俗物ルージンは次のように卑俗化して説明する。

「これまで「隣人を愛せ」といわれてきましたが、かりに私がそれを実行したら、どんな結果になるか。私は上衣を二つにさいて、隣人にわかち、そして二人ともども半分裸になるだけです。……ところが科学はいう、だれよりもまず自分ひとりを愛せ。なぜならこの世の一切は個人の利益に基づいているから。おのれ一人を愛したなら、自分の仕事もしかるべくやりおおせるし、自分の上衣も無事にのこるってわけです。経済学上の真理はさらに付言する。破綻のない個人事業が社会で多くなればなるほど、つまり無傷な上衣が多くなればなるほど、その社会にとって強固な基礎がふえ、同時に全体の事業もよりよく整って、いくとね」

三、これは急進派の「合理的エゴイズム」の剽窃である。たとえば一八五九年のチエルヌイシエフスキイの『資本と労働』には次のようなことが述べられている。「個人の利益は生産の主要な原動力である。生産の成否の尺度となる生産の

エネルギーは、生産への個人的利益の参加の程度につねに厳密に比例している」(石川郁男氏訳)。チエルヌイシエフスキイはここから「同一人における労働と所有の結合」という社会主義思想を展開するが、ルージンはブルジョア的エゴイズムに矮小している。ルージンの卑俗さに反撥するラスコーリニコフも、隣人愛の無力さは認めざるをえない。この愛の結果は、家族のために売春婦に身を落すソーニャ・マルメラードワの運命である。しかしラスコーリニコフはソーニャの無私の愛に共感している。この愛を救い、力あるものにするにはどうすればよいか。

四、こうしてラスコーリニコフの「ナポレオンの観念」が登場する。「全人類のために救世的意義をもつ思想の実現がそれを要求する場合」「法律を踏みこえる破壊者」になる権利をもつ「非凡人」が存在するという考えである。ラスコーリニコフの「ナポレオンの観念」をナポレオン三世の『ジュリアス・シーザー伝』や、あるいはマックス・シュティルナーの『唯一者とその所有』に関連させる研究があるが、これもチエルヌイシエフスキイの「いかなる重要な事柄も、それに先だつ理論なしには、また社会的権力の働きかけなしには、

社会において確立されえない。時代の要求を説明し、新しいものの合法性をみとめ、それに法律的保護をあたえることが必要なのである」(前掲書)との考えのネガ像といえるのではなからうか。メシヤとナポレオンの結合というラスコーリニコフの理想は、空想的社会主義の時代の奇怪な幻想なのであろう。